

「ありがとうございます」は動詞か？

～美しい日本語を護るために～

○日本語の乱れ

冒頭から妙な疑問を呈したのは、昨今日本語(国語)の乱れが目を見かねるばかりで、ついには正しい標準語を話すべき公共放送のアナウンサーまでが、間違っただけの言葉、語法を早口に、それがあたかも標準語であるかのように操っている場面を度々目にし、愕然としたからである。正しい日本語を話すことを厳しく教育、指導され、自分たちの言葉遣いが日本全国津々浦々にまで影響を与えるということを充分承知しているはずの彼らにしても、普段から無意識のうちに文法的に間違っただけの発言をしたり、「ら」抜き言葉を使って川端康成が賛美した「美しい日本語」をぶち壊したり、品性のない日本語を平気で常用している。そして嘆かわしいことに、間違っただけの言葉が正しい日本語であるかのごとく、誰も気にすることなく、いつの間にかそれが当たり前前の日本語として、世間に通用しているありさまなのである。

もったもある面で、言葉や言葉使いは時代とともに変化し、今日おかしいと感じた言葉が、時代の流れとともに変化して、いつの間にか別の意味を持つ言葉となって世の中に広まり定着するという事は考えられる。流行語にそれほど違和感や、抵抗を感じなくなっているということもあり得る。しかし、それも程度問題だと思う。折りに触れ、ある程度定着している言葉について、権威ある国の国語審議会等の教育機関で、その是非が議論され検討がなされ、その結果その言葉が日本語として認知され、改めて追認されたものであると概ね一般国民は理解している。問題なのは、言葉の普及に多大な影響を及ぼすマスコミだけが、そのような権威筋のチェックもなく、国語審議会等をも差し置いて、主観的な判断で自由勝手に話すことを黙認され、それが全国的に広まる特権を有する全体構造になっていることにある。

特に、慣習的に使用されているというだけの理由で、言葉使いに大きな影響力を持つ人たちや、マスコミ関係者だけが、明らかに国語文法上間違っている言葉使いを自分たちの基準

と判断で、正しい言葉使いとして他人に押しつけているとしたら極めて遺憾である。卑しくもわが国の学校教育の根幹である日本語(国語)をそんな風に軽々に扱って、しかも影響力を持つ側の論理と個人的な思い込みだけで、話し言葉を歪んだ方向へミスリードしていったよいものであろうか。そういう無神経さが日本語をみだりに乱している元凶ではないかと思う。これでは、あまりにも傲慢に過ぎるのではないだろうか。永年国語教育に携わり、これまで美しい日本語を護ってまいり努力してきた言語学者や、教育界の人たちに対して、不遜であるし、礼を失することになりはしないだろうか。

○摩訶不思議な言葉、「ありがとうございました」

乱れた言葉使いの端的な例として、一般的な感謝の気持ちを表す言葉、「ありがとう」について考えてみた。

「ありがとう」という言葉は、世間で日常的にごく頻繁に使われている。放送用語としても最も使用頻度の高い言葉のひとつである。しかし、今日その丁寧語を冠した「ありがとうございます」が、あまりにもぞんざいに歪められ、乱暴に扱われているのである。

「ありがとう」は、「おはよう」「こんにちは」や、「さようなら」とともに、短い日本語の挨拶用語の中でも、最も簡潔にして耳に心地良く、感情のこもった上品な日本語のひとつであると思う。この短い言葉の中に、話し手の思いやりのこもった、温かい感謝の気持ちが込められている。表現としては、過去、及び現在の行為に対して、等しく感謝の気持ちを相手に伝える言葉で、「ありがとう」の表現だけで充分つましい感謝の気持ちが溢れている。さらに、日本語特有の丁寧語を添えた場合、「ありがとうございます」となり、話し方に抑揚をつけたり、情感を込めることにより一層上品で、美しく、格調高い言い回しとなる。

しかし、いつの頃からか、誰も彼もが深く考えることなく「ありがとうございました」と動

詞的な表現をするようになり、しかも「ありがとうございます」という表現を乱暴にも過去形化して、本来の意味合いと遊離した表現に変えてしまった。「～ございました」という表現は、例えば「お父様は立派な方でした」とか、「応接室はかつて社長室でした」というように、単に動詞「ある」の現在形を過去形化した、丁寧な表現として用いられるのが通例である。この場合は、明らかに正しい動詞として使われている。しかし、「ありがとうございました」の「～ございました」は、動詞の過去形として使われたのではなく、「ありがとう」の「付属語」的な丁寧語「ございます」が添えられたうえで、一方的に過去形に変形させられている。「ありがとう」という単語があって初めて、「ございます」の存在に意味がある。それ故に「ございます」が、「ありがとう」から独立して勝手に変化することはあり得ない。当然「ありがとうございます」が正しい言葉であり、「ありがとうございました」と変化することは断じてありえよう筈がない。

○目の前の行為を過去形で言い表せるのか？

私にはかねてより「ありがとうございました」の使い方について、素朴な疑問があった。まず、仮に「ございます」が動詞「ある」の丁寧語(前述の通り実際には、「ありがとうございます」の「ございます」は、「付属語」的な丁寧語である)であるとの前提に立つにしても、現在目の前にいる相手と話している時に、いま表現しようとしている相手への感謝の気持ちを伝えるのに、なぜ過去まで遡り過去形を使用しなければならないのか、という単純な疑問である。時制を根底から無視している。文法上から考えてもどうしたっておかしい。

察するに「昨日は、ご馳走になりありがとうございました」のように、「昨日ご馳走になった」という過去の出来事や、行為について感謝しているので、気分的に過去形で表現したと言いたいのであろう。そして、この考え方、及び言葉使いが深く考えられることもなく一般に常態化して、抵抗もなく受け入れられている。だが、「ちょっと持て！」と言いたい。どうして上品な日本語が、慣習というだけでこんな乱暴な日本語に変化してしまったのだろうか。この場合だって「昨日はご馳走になり、ありがとうございます」と表現するか、文章をふたつに分けて、

「昨日はご馳走になりました。ありがとうございます」と言うべきではないだろうか。行為自体は、確かに過去に生じたものであるが、その過去の行為発生から現在まで戻って、現時点で向かい合っている話相手に感謝の気持ちを伝えているのである。

敢えて英語流に表現すれば、時間の経過も含めた現在完了形の「継続」とでも呼んだらいいだろうか。「have+過去分詞」の組み合わせで表わされ、この場合も現在形「have」は、決して過去形「had」にはなり得ない。

仮に「～ございました」との表現にどうしても拘るなら、同じ語法として、口語的に次のように表現しても正しいということになるのではないだろうか。「昨日はご馳走になり、心より感謝致しておりました」。しかし、どう考えてもこの表現はおかしくないだろうか。当然ながら、行為自体は過去に起きたことではあるが、謝意を表しているのは、正に現在であり、時制が一致しないからである。だから、ここは、「昨日はご馳走になり、心より感謝致しております」が、正しい表現だと思うのだが……。

もうひとつの疑問は、なぜNHKを始めとする放送界が公共の電波を使い、自社アナウンサーのみならず、番組ゲストに対してまでも間違っている言葉使い「ありがとうございました」を押しつけ、濫用させているのだろうか。また、その誤りを正そうとしないのだろうか。現状は視聴者に無用な誤解を生じさせるばかりでなく、NHKが間違った日本語教育の方向へ視聴者を誘導していると言ってもいい。

○言葉遣いの先導師・NHKの対応

最近「正しい日本語」とか、[言葉使い]に関して、一部に秘かな日本語ブームが湧き起きている。それも「日本語の乱れ」がその背景にあるからだと思う。NHK放送文化研究所が調べた「日本語が乱れている」と感じている人の割合は、年々増加して「非常に乱れている」と感じる人の割合は、ほぼ全体の四分の一を占め、多少乱れていると感じる人まで含めると、なんと八割を超えるそうだ(2002年11月18日付朝日新聞)。NHKを始め、放送会社が、現代人の言葉使いの変化と誤りを意識している

ことは、こんな調査を度々繰り返し実施していることでも明々白々である。

これらの疑問について、日本語の言葉使いに最も影響力のあるNHKに単刀直入に尋ねてみた。

1. 「ございます」は独立した丁寧語で、「ございました」と変えることは出来ないのではないか。
2. 「ありがとうございました」は過去形で、明らかに間違った表現であり、正しくは現在形の「ありがとうございます」ではないか。
3. NHKのアナウンサーは押しなべて「ありがとうございました」と言っているが、「ありがとうございます」という正しい表現に戻すことは考えられないか。

上記三つの質問に対して、NHK放送文化研究所放送研究部用語研究班の柴田実氏は、わざわざ資料用に、文化庁編纂の『ことばの問答集』六一五頁に記載の『『ありがとうございます』と『ありがとうございました』のコピーを同封されたうえで、次のように回答された。

1. 丁寧語というより、敬意を含んだ表現であり「ありがとうございました」は、社会の規範と社会事情の変化により、いまや世間一般に受け入れられている。
2. 文法としては、「ございます」「ございました」は理論上両方ともあり得る形である。ただ、三〇年前以上は、「ありがとうございます」の形が慣用的に使われており、それ以後最近まで「ありがとうございました」の語形が多くなってきている。
3. アナウンサーの話し言葉について、助言は与えるが、どう指導して、どういう表現をするか、はアナウンス室の主管事項である。

上記1、2の質疑の中で、柴田氏は現在多用されている「ありがとうございました」という表現より国語教育では「ありがとうございます」の方が文法的に正しいと教えられていることについて、今日のわが国の国語教育、及び文法は、世間の社会事情の進展に比べて、遅

れているという大胆な発言までされた。

世間に対して疑問を抱かせる3については、改めてNHKアナウンス室でアナウンサーの言葉使いなどの指導に当たっている高橋敦之氏に率直に尋ねてみた。

1. 「ありがとうございました」は、今日慣用的に世間で認知されている。一般に挨拶用語的に使用される「～ございます」という言葉は、「ありがとうございます」「おはようございます」「おめでとうございます」の三通りぐらいしかない。「おめでとうございます」で判るように「おめでとう」と「ございます」という二つの言葉に分けられているので、「ございます」が「ございました」と変化することはあり得る（独立しているからこそ、意味もなく変化すること自体がおかしい。高橋氏の倫理は前述の私の指摘と相反する）。
2. 文法的には、「ありがとうございます」が正しい。以前にもある年配の方から同じ指摘を受けたことがある。しかし、今日では文部科学省の国語審議会のメンバーや、言語学者の中にも「ありがとうございました」の用法は間違っていないという（しかし、正しいとまでは言っていない）学者もいる。
3. アナウンサーには、世間で通用する慣用表現に則った言葉使いを指導している。

上記三の回答については、私が指摘した間違った表現をNHKが今後も繰り返す懸念があり、NHKによって日本語がますます乱され、混乱する恐れがあるため、さらに高橋氏に対して、「慣用的に馴染んできているとは言え、影響力の強いNHKのアナウンサーが明らかに文法的に間違った言葉を、全国放送で話すことは視聴者に多大の誤解を与え、好ましくないのではないか？」と質した。

この私の疑問と質問に対して高橋氏は、「場合に依ってアナウンサーは、『ございます』と『ありがとうございました』を使っている（使い分けをしている）」と応えられた。

「私の見る限り、インタビューと歌謡番組などの司会では、NHKのアナウンサーは、‘九分九厘、ありがとうございました’と言っている。特に、毎日曜日夜の『サンデースポーツ』で、女子アナウンサーがインタビューする場合に、

『ありがとうございます』と話すのを聞いたことがない。アナウンサーが話す言葉使いをよく観察して欲しい。アナウンサーは使い分けなんかしていない。決まりきったように『ありがとうございました』と言っているのは、そのように指導しているからではないか？」

特に、件の女子アナウンサーは、インタビューの冒頭からゲストに対して、「お越しいただきまして、ありがとうございました」と言っている。なぜ、ここは「ありがとうございます」ではないのだろうか。この疑問に対して、高橋氏はインタビューの始まる前に、長い時間にわたってゲストを「持たせた」(過去形)ことから、過去形的な発言になったと苦しい言い逃れをしていたが、それなら、前記文化庁編纂『ことばの問答集』の用例「電車に乗ると、始発駅では『毎度御乗車ありがとうございます』という言い方で始まる」に従うなら、どのように説明されるのであろうか。長い間乗客は発車を待っていたと思うが……。

いずれにしろ一連のやりとりの後で、高橋氏は最後に、「ご指摘のケースを今後よく注視してみる。今後『ございました』という表現を止めて、全面的に『ございます』という表現をするようアナウンサーを指導する、というはっきりした約束までは出来ないが、もう少し『ありがとうございます』という言葉を使うようアナウンサーを指導したい」との言質を得たことから、曲がりなりにも言葉使いの改善を約束してくれたと思っている。

これによって一件落ち着いたわけではなく、「ございます」が動詞として使用された場合に、「ありがとうございました」が、必ずしも正しくない表現であると認めながら、世間では慣用的に容認されているという抽象的な言い回しで、言語学者のだれそれ氏が「ございました」の表

現が正しいと言っているとか、いつの国語審議会の結論がそうであったとの具体的な証左や、裏付けがまったくない。今後もNHKを始め、他の民間放送局、さらにマスコミ関係者が正しい日本語の言葉使いをするよう私たちも監視していく責任があると考えている。それが、言葉使いの乱れから美しい日本語を護り抜く地道な方法であり、それが最も基本的な対応策であると思う。

よく考えてみると分かりそうなものだが、「ありがとう」という言葉自体は、体裁、意味ともに同じで一語の同義語としては、丁寧語を付した「ありがとうございます」以外は考えられない。時制が入り込むような言葉ではないし、文章でもない。むしろ、単語、敢えて言えば普通名詞的抽象名詞なのである。外国語の例もよく調べてみると一層はつきりする。「サンキュー」「メルシ」「ダンケ」「グラシャス」「グラツエ」「オブリガド」「謝謝」「多謝」「スパシーバ」「コップクン」「テレマカシ」「チーズテンバレ」等々、これら感謝の気持ちを表す世界の言葉は、単一の単語でその気持ちを表しており、まったく動詞化してはいない。精々修飾語を伴う程度である。当然ながら決して「サンキューでした＝Thanked you. 」とは言わない。

○正しい日本語を後世に伝えよう。

私たちは、長い歴史と伝統のある美しい日本語に対して、もっと愛おしい気持ちで接し、慈しむ愛情と気持ちを持ち続けることが大切であると思う。一握りの専門家だけに任せっぱなしにするのではなく、一般の人たちも日頃からもう少し自分たちの言葉に対して責任を持ち、深い関心を抱き、謙虚に正しい日本語と相対し、正しい日本語を後世に伝えていく責務を負っているのではないだろうか。

幸いにしてNHKの関係者から、乱れている言葉使いとNHKの言葉使いの放送対応につ

いて、ある程度前向きの姿勢を知り、とりあえず安堵したところである。だが、今日までの日本語の乱れに到る経緯を考えると、言語の普及や流行に最も敏感で、責任をもっている筈の放送関係者が、今後とも美しい日本語、正しい日本語を護っていこうという真摯な気持ちを堅持しなければ、いずれまた「美しい日本語」は、元の木阿弥となってしまう。出来れば、時折は私たち一般国民も流行する言葉使いや、マスコミ関係者の対応について仔細に観察し精査して、真っ当な意見を述べ、時に応じてそれが国語専門家や、マスコミ関係者間の論点となり、誰でもが納得出来るような正しく、美しい日本語が公的に読み、書き、話されるように、ひとりひとりが注視を続けていくべきであると思う。現今のマスコミには、ややもすると「日本語造語賞」や「流行語大賞」などで、言葉を弄んだり、低俗番組の中で方言を売り物に悪ふざけしたり、下品な言葉使いのタレントなどに迎合したりして、みだりに言葉の乱れを助長するような風潮に手を貸している節が見

られるが、自らの立場と責任を断じて見失うようなことがあってはならない。

同時に何よりも私たち日本人ひとりひとりが、先祖伝来の美しい日本語を正しく後世に伝えるために、日常生活においても、常に正しい日本語を話すよう心がけていくことが大切である。

言葉が時代の変遷とともに変化していくことは紛れもなく現実であり、この先どこまで変貌していくのか皆目見当もつかない。しかし、もしこのまま放置したら間違いなく日本語は朽ち果て、美しい日本語は、いずれ消滅の運命を辿るであろうことは、想像に難くない。私たちは、普段話している言葉をどれだけ大切に想い、万葉の時代から息づいて来た美しい日本語を、現代の文化遺産としてどうしたら後世に伝えていくことが出来るかという点にもっと関心を持ち、自分たちの固有の文化を護ることを真剣に考えていくことを忘れてはならないと思う。